

掲示板

ご案内と報告

ミニシンポジウム「佐渡ジオパークとはなにか -ジオパーク講座から思うこと-

基調講演「佐渡ジオパークのめざすもの」 ジオパーク推進指導員 神蔵勝明
ミニシンポジウム

- 一部 テーマ「佐渡ジオパーク講座で感じたこと」 発表者 佐渡ジオパーク市民講座受講生
- 二部 テーマ「佐渡ジオパークに期待するもの」 参加者全員による討論会

日時：2月20日(日) 13:00～16:00

会場：金井西部地区コミュニティセンター(金井能楽堂) 参加費：無料

問合せ先：佐渡市教育委員会社会教育課佐渡学センター TEL 0259-23-2100

佐渡国小木民俗博物館特別展
「ジオパークって、なあと～小木半島編」

期間 平成23年2月1日(火)～28日(月)
場所 佐渡国小木民俗博物館
料金 大人500円、小人200円(通常料金)

佐渡市がジオパークを目指すことになりました、その中核となる小木海岸の優れた地質についてわかりやすく紹介します。

相川郷土博物館特別展
「博物館収蔵品展 石井夏海・文海関係資料」

期間 平成23年2月7日(月)～3月27日(金)
場所 相川郷土博物館 特別展示室
入館料 大人300円 小中学生100円

普段公開していない貴重な博物館収蔵資料を今後公開していきます。第一弾として、佐渡奉行所地方付絵師であった石井夏海と、その息子文海についての資料を公開します。

企画展の報告

平成22年12月1日(水)～28日(火)の間、佐渡国小木民俗博物館において、企画展「島の原風景～第1回近藤福雄賞写真コンテスト入賞作品展～」を開催しました。

この企画展では、「佐渡國ビエンナーレ近藤福雄賞写真コンテスト」の第1回入賞作品29点を展示しました。来館者からは、「佐渡の素晴らしさを実感しました」、「原風景を実感しました」などの感想がありました。

今後、第2回から第5回までの入賞作品の展示も検討しております。決定しましたらお知らせいたしますので、ご来場をお待ちしております。

編集後記

地球温暖化の危惧が叫ばれながらも、近年にない寒い日が続いております。気象庁の記録でも、この冬は同時期の平年より気温が低く、降雪量は多くなっています。一方、ブラジルやオーストラリア等では過去にないほどの豪雨の被害がでています。「異常気象」の文字や言葉が新聞やテレビから頻りに飛び込んできます。夏の猛暑とこの寒さ、船便の減少に、景気の影響ももろに受け、遠出する余裕と気持ちが出てきません。自分の気持ちとは裏腹に、佐渡への観光客増を期待していましたが、昨年度の島内の観光施設への訪問者は減少し、佐渡市にとっては大打撃となっています。当佐渡学センターの所属である各博物館・資料館も例外ではなく、減少傾向にあります。新しい年度に向け、島内の人びとを惹きつける魅力のある博物館・資料館となるための工夫に努力がより必要です。ご案内の企画もその一つです。島の魅力を知って戴ければ幸いです。

発行 佐渡学センター (佐渡市教育委員会 社会教育課)

〒952-0021 新潟県佐渡市秋津1596 両津郷土博物館内 電話 (0259) 23-2100 FAX (0259) 23-4820

ホームページ <http://www.city.sado.niigata.jp/sadobunka/denbun/>

佐渡学センターだより

佐渡学センター
(佐渡市教育委員会社会教育課)
2011年1月31日(月)
第3号

実物を見るジオパーク活動 ジオパーク推進指導員 神蔵勝明

もう50年もまえのむかしの小学校での話である。現在の佐渡自動車学校の場所に、吉井村立吉井小学校(旧吉井村分村前の小学校)があった。今は当時の石垣が残るばかりだが、大きな桜の木がみごとで、たまにフクロウのふわふわ産毛のかわいいヒナが見つかるようなこともある、ベビーブームまさかりで大勢の生徒であふれた、活気のある、大きくて威風堂々とした小学校だった。戦争後の何もない時代であったから、理科実験室はがらんとして何もなかったと思う。古い話で何学年のことだったかは忘れたが、今でも思い出すことのできるシーンがある。三脚にビーカーをのせお湯を沸かす実験である。たったこれだけ。時間がたつにつれ対流がおこり、水がクルクルと上下に回転したのである。私はこれを見てまこと綺麗なものだと思った。このときの水の中で動くゴミの様子が今でも頭の片隅に残っていて思い出せるのである。そしてこれが対流と言うものだと教わった。

もうひとつある。教員になって6～7年後、山の中の分校から都会の進学校に転動した。私の担当は化学であったが、隣に物理教室があって、いつもニコニコしている気品のある定年近い物理の先生が実験授業をしていた。有名な進学校だからさぞ面倒な実験をするのだらうと思っていたのだ

が、なんとも簡単な斜面の実験で、板の上に木の角柱をのせ板を傾けていき角柱が滑りだす角度を測る実験であった。簡単この上ない実験を百戦錬磨の老教諭が淡々と生徒たちにさせていた。真剣に実験している生徒たちの自然現象を完璧に理解するさつと雲がひいて広い下界の景色が一瞬に現れるような納得の瞬間の雰囲気を感じてハッとした。黒板での説明で計算ができるようになる生徒は多いだろうが、摩擦力が破れる瞬間のなまなましさを想像できる生徒はまずいないであろうと思ったからである。

ある本にアメリカの高校で行われている理科教育の話が載っていた。まず実験をやり、議論して、その上で理論や原理を学び、レポートを書く。それだけだそうである。日本の高校で行われている講義形式中心で小テストを繰り返す理科教育と正反対である。なんとすばらしい教育であろうと私も思う。「地学」や「地球科学」の分野は、時間と空間のスケールが大きいのが特徴の世界であるが、本や画像だけで理解したと感ずるのは大きな勘違いであり、やはり露頭を前にして実感することが欠かせない。これを行うのがジオパーク活動の目的のひとつで、くちさきで表現できない瞬間にあふれているのである。

写真だより



波蝕罅穴群



台ヶ鼻古墳
(現在は砂に埋もれています。)

台ヶ鼻は、二見半島の東南端に突き出た丘陵の先端部にある小さな岬です。この岬には台ヶ鼻古墳があります。また、東側岸辺には、長さ62m、最大幅12mにわたる平坦な岩盤上に、大小の波蝕罅穴群があります。罅穴の大きさは、最大で直径1.3m、深さ1.2mあります。満潮時には水面下5cm、干潮時には水面上25cmの状態になります。

なお、台ヶ鼻は岩礁、地形、植物の景観がすぐれ、真野湾をへだてた対岸の海岸線、日本海の眺望も美しく、名勝地にふさわしい要件がそろっており、県の「天然記念物及び名勝」の指定を受けています。

佐渡国小木民俗博物館の紹介

昭和47年6月に開館した佐渡国小木民俗博物館は、廃校した宿根木小学校校舎(大正9年建築)を利用した博物館です。展示資料は農具や漁具などの民俗資料が中心で、その数はおよそ3万点。その内、「南佐渡の漁撈用具1,293点」と「船大工道具1,034点」は国の重要有形民俗文化財に指定されています。

また、隣接している千石船展示館(平成10年完成)には、江戸から明治にかけて活躍した北前船を忠実に復元した「白山丸」を展示しています。この「白山丸」は7月の最終日曜日に開催している白山丸まつりで屋外に曳き出し、帆を上げて公開しています。

さて、館内で耳をすますと、あちらこちらから「ハ行」の音が聞こえてきます。まず受付を通るとすぐに聞こえるのは、「へー」の声です。「幸栄丸」の板図(設計図)をもとに原寸大で復元した「白山丸」は全長23.75m、高さ5.61m。この船を下から見上げる時に出る声が「へー」なのです。このほか、南佐渡の農具や漁具を展示している新館から聞こえてくるのは、展示資料の解説を見て「ふ〜ん」と静かに納得する声。開館時に地域の人々が自ら農具や漁具を持ち寄った資料がズラリと並



佐渡国小木民俗博物館

ぶ本館からは、その数の多さに「ほおー(よくぞここまで集めた。)」と感心する声。企画・特別展などにも利用する3年生教室は、通常、児童の小さな木製の机と椅子を並べて昭和の教室風景を再現しており、ここを訪れた入館者からは「はあー!(本当はわあー!に近い)懐かしい。」という歓声があがります。「ひ〜」については、実際に博物館へ足を運んでお確かめ下さいませ。あしからず。)

この博物館を海岸に向かって坂を下ると、重要伝統的建造物群保存地区に指定されている宿根木地区があり、見学に訪れる人が年々増えています。博物館とあわせて歩いてみてはいかがでしょうか。

翌日は佐渡市中興の金井能楽堂を会場に3名の教授による講演会を行いました。最初に新潟大学人文学部の關尾史郎学部長による「私のシルクロード史研究」、続いて「平家物語と佐渡」について講演した鈴木孝庸教授は、前日に引き続き平曲「弓流し」を演奏しました。最後に、同大学人文学部の池田哲夫教授が「佐渡の民俗芸能の位置」と題し各地の祝福芸の事例を交えながら講演しました。集まった人たちは、先生方の講演に熱心に耳を傾けていました。

2日間で160名余りの人たちが「佐渡学セミナー」に参加し、佐渡の文化や歴史について学びました。

新潟大学人文学部と連携協定を結んでから、世阿弥と佐渡の能楽についてのシンポジウムの開催や赤泊地区徳和における民俗調査などを実施しています。今後も教授や学生たちと協力しながら佐渡にとって有意義な調査研究を進めていきたいと思ひます。



關尾人文学部長

佐渡学セミナー、開かれる

平成23年10月2日と3日の2日間、佐渡学センター主催で「佐渡学セミナー」を開催しました。これは昨年3月に新潟大学人文学部と佐渡市教育委員会が連携協定を結んだ事を記念して開かれたものです。

初日は佐渡市竹田の大膳神社能舞台で、プレセミナーとして「平家琵琶、奉納演奏『那須与一』」を行いました。演奏者は平家琵琶奏者としても活動を続ける新潟大学人文学部の鈴木孝庸教授です。幻想的な空間の中で琵琶の音色が境内に響き渡りました。

文化財散歩道「春日崎」の文化財

春日崎は相川湾の南端に西へ突き出るように位置する岬です。基盤となる地質は相川層群に属する安山岩です。岩の絶壁上に海岸段丘の平坦面が広がっています。ここからは相川湾と市街が一望でき、条件のよいときは小川集落まで見渡すことができます。

現在見ることができる文化財は、戦国時代末以降に造られたものです。それらを紹介します。

春日崎石灯籠

春日崎
石灯籠

1628(寛永5)年に相川湾を航行する廻船の安全のために常夜灯が設置され、点灯や灯の管理は相川下戸町にある春日神社が担いました。現在残る石灯籠は江戸時代後年に建てなおされたものと考えられ、立浪会などの踊りの背景となって観光ポスターなどに登場します。

春日崎石切場跡

岬の北側斜面にあります。春日崎石灯籠の石材もここで採掘したものと思われます。採掘された石材は土台石などに加工され、近郷の需要に応じていたようです。

流人大岡源三郎の塚

岬の平坦面に土塚があります。これは江戸時代の流人大岡源三郎をしのんで門人たちが築いたとされています。大岡源三郎は、慶安の事変で由比正雪の片腕と

流人
大岡源三郎の塚

なった丸橋忠弥に拝領長屋を槍の道場として貸していたことが発覚し、流罪となりました。相川諏訪町に槍の道場を開いて自活し、門人も多くいましたが、1655(承応4)年に春日崎で自害しました。共に流されてきた弟の虎之助は後に赦免されて大岡家を再興しました。

19世紀には遠見番所が置かれて大砲などが設置されたり、1948(昭和23)年~1954(昭和29)年にアメリカ軍が駐留したこともあります。

このように春日崎は、廻船の航行・インフラ整備用資材の確保・流人の足跡・鎖国時代の海防といった江戸時代の相川をしのぶのに適した文化財が小さな範囲に集中しています。

また、大変景色のよいところで、駐車場・草地・あずま屋・公衆トイレを備えた公園的な場所になっており、いつでも気軽に立寄ることができます。



春日崎 石切り場跡

活動報告

「武蔵国分寺薪能で、佐渡の能と狂言を披露」

旧真野町と姉妹都市交流を続けていた東京・国分寺市は、市町村合併に伴い平成17年に佐渡市と姉妹都市になりました。様々な分野で交流が続く中で、文化交流事業の一環として「武蔵国分寺薪能」があります。昨年9月18日に開催された「第18回武蔵国分寺薪能」には、佐渡市から佐渡能楽連盟と佐渡

鷺流狂言研究会が招待されました。

会場の史跡武蔵国分寺跡には特設能舞台が設置され、薪能を楽しみに集まった700人あまりの国分寺市民で席が埋まりました。今回の番組は、佐渡鷺流狂言研究会が「鬼の槌」、佐渡能楽連盟が「巻絹」です。

闇の中に浮かび上がった能舞台で演者たちは洗練された舞いを披露すると、2時間を超える舞台もあっという間に過ぎ、魅了された観客らから大きな拍手が贈られていました。